

【論 文】

„Stiller“ の成立

村 上 文 彦

要 旨

ロックフェラー財団から奨学金を給付されることになったMax Frischは、この機会を利用してアメリカに滞在した。アメリカに行くことは彼のかねてからの希望であったが、個人で実現させることは困難であった。アメリカで彼は自分の世界観を拡大したいと思っていたのである。そして、アメリカ滞在中彼は小説を書きたいと念願していた。滞米中、日々原稿を書き、それらは次第に蓄積されていくが、一つの作品にはなかなかまとまらなかった。それでも彼は執筆を続け、原稿の量は600頁にも及んだ。この材料をどのように加工すればまとまった作品になるのか、彼は苦闘していた。そこで彼に適切な助言を与えたのがドイツの出版者Peter Suhrkampであった。この人の存在があつてこそFrischは最初の長編小説 „Stiller“ を完成させることができたのである。

はじめに

本論の研究対象であるこの „Stiller“（邦訳：『ぼくはシュティラーではない』）は、1954年、スイス人作家Max Frischが43歳の時に上梓した彼の最初の長編小説である。彼がこの作品を完成させてからすでに60年近くが経過しているが、示唆に富んだこの作品から今なお学ぶべきことは多い。

筆者はこれまでこの „Stiller“ の生成に関する研究論文を2度にわたり総合文化研究に分割掲載したが、その理由は一回の掲載枚数に制限があるためである。さらに今後もこの „Stiller“ に関する研究論文を継続掲載していく予定であるが、今回本論においては、この作品のより深い理解へと至るために不可欠な部分に焦点を当て、とりわけこの作品完成までの経過をさまざまな角度から分析検証し、Frisch文学理解に資するのが主旨である。

1 Frischにとってのアメリカ

Max Frischの没後ほぼ20年を経た2010年、ETHにあるMax Frisch-Archiv¹⁾に保管してある未完の原稿をまとめた、Peter von Matt編による „Entwürfe zu einem dritten

Tagebuch“（邦訳：『Max Frisch 第3の日記への草稿』）というタイトルの本がドイツの Suhrkamp出版社から刊行された。²⁾ その冒頭に次の記述がある。

「挑戦としてのニューヨーク、私はもう数十年来信頼している、私はそこで無為に時を過ごすことはなく、エンガディン地方やパリでのように骨休みするのではなく、何か我每天私の心を刺激するのを確信している。…」

1951年4月、祖国スイスを離れてヨーロッパとは異なる文化に触れ、「古典的な教養で得てきたヨーロッパ的偏狭な世界像を最終的に自分の体験を通して拡大し、今日の世界の現実に一段と深くなじませるためにアメリカ合衆国を知りたい」³⁾ という願いを抱いて渡米した当時40歳のMax Frischは、翌年5月に帰国するまで約1年1か月間滞米した。中心的に滞在したのはニューヨークで、マンハッタン南西のハドソン川に近いクリストファー・ストリートにアパートを借りたのである。彼は滞米中、シカゴ、サンフランシスコ、ロサンゼルスなど、アメリカの諸都市を訪れ、また11月にはメキシコ旅行をも行っている。

このアメリカ滞在を可能にしてくれたロックフェラー財団のEduard F. D'Arms氏に宛てた1950年12月の手紙の中でFrisch自身が予想しているように、このアメリカ滞在は彼にとって、まさに『人生の決定的な一年』⁴⁾ となった。この時期以降の彼の作品、とりわけ散文作品には必ずや何らかの形でアメリカの体験が色濃く反映されているのである。たとえばここで扱う „Stiller“ や、さらに彼の代表的な小説作品である „Homo faber. Ein Bericht“（1957年）や、 „Montauk. Eine Erzählung“（1975年）などは、アメリカでの経験抜きではその成立が考えられない作品である。

この滞米でアメリカを気に入った彼はそれ以降何度もアメリカを訪れ、しばしば長期滞在し、さらにその体験を重ねていったのである。だが同時にFrischの根底には常に祖国スイスがあった。たとえ彼がスイスを批判しようともそれはあらゆる意味で彼の祖国に対する愛情のあらわれであった。したがって、彼がアメリカを体験するということは、祖国を外側から見るといふことと同義なのである。Frischにとって、アメリカの比重が大きくなればなるほど、それに比例して祖国への比重も同様に大きくなっていったのである。このことは、その後の彼の作品なり、行動なりを見れば明らかである。この初めての滞米後も彼はとりわけアメリカ合衆国と深いかかわりを持ち続け、後年マンハッタンの南に位置するソーホー地区のプリンス・ストリートにロフトを購入し、長期間滞在し、またスイスに戻ってからもしばしばニューヨークを訪れたのである。

アメリカで彼は様々な体験をし、それらは、 „Stiller“ の中にも主として挿話の形で反映されている。アフリカ系の人々との出会いや、カールズバッドの洞窟の話などは彼がアメリカで得た収穫の成果の典型的なものである。スイスとは異なる自然、文化、人々。『アメリカというところは、我々ヨーロッパ人が普段言っているような一つの国ではなく、単一民族ではなく、多数の移民が住む、未だかつて閉鎖されたことのない一つの大陸だ』と彼は表現している。⁵⁾ 四方を山々で囲まれ、行く手の視界もすぐにそれらの山で遮られる、狭い国土のスイスとはまるで異なる、広々とした世界がそこにはあった。何ものにも縛られることのない解放感、彼がこれまで意識したことのないほどの自由がアメリカにはあったのである。スイスでの日々平穏で、長い伝統に培われてきた市民文化の中で秩序と清潔

さを保ち、瑣末なことにも神経を使い、その社会に自分を適合させて生きる人生、それらのこれまで営々として送ってきたものとは違う世界が、この世の中に巖然として存在していたのである。これまでとは異なる世界が存在することをアメリカで初めて知ったのである。野性的で混沌とした別種の秩序、人種のるつぼ、様々な市民たち、人口の洪水、雑踏、喧騒、臭い、忙しく行動する人たち、活気ある生活。混在し独特に作り上げられた文化、異なる倫理観、正義感、西部に行けばいまだ漂う開拓者たちの香り、何もかもがスイスとはケタ違いに異なっているのである。大きさも高さも違う高層ビルが林立する巨大都市、チューリヒの何十倍もの規模の町、大都会ニューヨーク、そこで彼は無限の刺激を感じたのである。アメリカ大陸の遙かなる広がり、遮るもののない国土、そこにあるのは文句なしの解放感であった。伝統や、秩序や道徳観など、いわゆるコモン・センスの呪縛から解き放たれた、精神の自由があったのである。スイスでのように1週間も雪に降り続けられて行き場がなく家に閉じ込められてしまうこともない、山々で行く手を遮られてしまうこともない、祖国で感じる様々な限界がここには存在しなかったのである。今まで暮らしてきたチューリヒがスイス第一の都市とは言ってもそれは狭いスイスに限ってのことであり、広大なアメリカの諸都市に比すれば地方の小都市の規模に過ぎない。これまで過ごしてきたチューリヒでの生活、すべての面で自己を適合させてきた生活と精神性、自分を律する倫理観、それらの縛りがアメリカに来て一挙にほどけたのである。無意識に自分を制限していたタガが外れたのである。旧来の伝統、こじんまりした市民生活、束縛する常識、それらから抜け出して、未知の地に降り立った彼にとってこの新しい国はあらゆる意味で遮るものがなく、すべてが新鮮で活気あふれる世界であったのである。このアメリカに共感する部分は多く、この国と自分自身との適合性を認識したのである。

このアメリカ体験は、地続きのヨーロッパ隣国を旅する体験とは違い、初めて異種の文化を味わったのである。以前訪れたヨーロッパの隣国訪問は、長い伝統に培われた西洋文化に根付いた自国と類似した文化の体験であり、違和感は少なかった。しかし、海を隔てたアメリカでの体験はそれまでの体験とはまったく別物であった。遮られることのない、広々とした体験であり、彼にとっては、スケールの大きい体験であった。型破り、野性的、感情的、原始的などなど、様々に表現できる荒々しい体験がそこには存在した。そしてそれらの一つ一つが、彼の心を刺激し、創作活動の原動力となった。アメリカにある開放性、精神的な柔軟さが彼には心地よかった。

しかし、彼は初めて目にするこのアメリカを一方的に礼賛するばかりではない。たとえば、『第3のノート』に記されたニューヨークのパワリー街の描写に表れているようなアメリカの恥部をも冷静に観察している。それら負の面を含めて、アメリカ体験は彼にとって創作の強力な推進力となった。アメリカに感じるのは限界ではなく、無限の可能性であった。Frischはここで異文化のシャワーを全身に浴びたのである。それはさすがしく、まさに彼をリフレッシュさせてくれたのである。そして彼はその大都会の中で浮かれて過ごしていたのではなかった。作家としての姿勢を崩すことなく日々過ごしていたのである。それは自分自身との対峙でもあった。彼にとってのニューヨークは、休暇を楽しむエンガディン地方や観光して回るパリの街とは違って、精神をぶつけて挑戦する街なのである。

思い切ってぶつかり、全身で対決する街なのである。それゆえにアメリカは彼が何度も訪れる巡礼の地となったのである。

2 その頃のFrisch

Max Frischは創作活動を始めた最初の頃散文作品を書いていたが、チューリヒ市にあるシャウシュピールハウス劇場の脚本家であったKurt Hirschfeldに勧められて劇場作品を書きだした。それは1944年、Frischが33歳の時であった。これをきっかけにその後8年間は舞台作品を執筆していたのである。そしてそれらはすべてシャウシュピールハウス劇場で上演されていた。その間、1950年に彼独特の日記スタイルの作品 „Tagebuch 1946-1949“ を刊行してはいたが、1954年久しぶりにこの長編小説 „Stiller. Roman“ を発表したのである。

Eduard Stäubliは概ね次のように述べている。⁶⁾

「Frischの著述家としての創作は、散文作品 „Jürg Reinhart“ で始まっている。その後、 „Blätter aus dem Brotsack“ や „Bin oder Die Reise nach Peking“ などいくつかの散文作品が続いているが、ここでFrischは散文作品の執筆を中断させている。それは1944年のことであったが、この時から彼の劇場作品の執筆が始まったのである。彼は „Santa Cruz“ から „Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie“ までの6つのドラマ作品を書いており、この „Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie“ は、1953年に初演されている。⁷⁾ そしてそのほぼ1年後、つまり散文作品執筆中断から10年を経て600頁に及ぶ小説 „Stiller“ を発表し、Frischは彼の読者を驚かせたのである。この並外れた作品は、最高のセンセーションを巻き起こし、批評家たちに憤慨して拒否されると同程度に称賛され、スイスやドイツばかりではなく、たくさんの翻訳のおかげで⁸⁾、世界中に多くの読者を見出したが、それは最近数十年おそらくどのスイスの作品もなしえなかったほどである。」⁹⁾

このStäubliの記述に、この小説が当時いかに大きな反響を呼び起こしたかがうかがえる。「憤慨して拒否されると同程度に称賛され」という文章から、この作品が好感を持って受け入れられただけではないことが十分に伝わってくる。この作品中のスイス描写がスイス批判と受け止められた点をStäubliは指摘しているのである。Volker Hageもrororoの „Max Frisch“ 巻末のエピソードで、ほろ酔い加減の見知らぬ紳士がFrischに声をかけてきた挿話を紹介しているが、その中でこの紳士のようにFrischがスイスの没落を望んでいると誤解した人たちがいることを挙げている。¹⁰⁾ それがFrischの本意ではなかろうとも、既に刊行したものは彼個人のものではなく、作品の一部をどのように解釈するかによって様々な反応が生じるのは当然起こりうることであり、Frischをどのように理解する人がいようとも、それはFrischが作家として受け止めていかなければならない宿命であろう。

この作品 „Stiller“ は完全な小説であり、1950年に発表されたFrisch独特の執筆形式で描かれた散文作品 „Tagebuch 1946-1949“ とは本質的に異なっている。Frischは „Tagebuch“ というタイトルを付した作品を存命中に2冊刊行しているが、いずれも作品全体を通しての物語性は欠如しており、小説ではない。¹¹⁾ Volker Hageは次のように述べてい

る。「50年代の初めのころ彼は劇作家と見なされていたが、もしかすると彼自身その当時すでに自分本来の強みは散文作品にあると思っていたのかもしれない。1954年に „Stiller“ , 1957年に „Homo faber“ , そして1964年に „Mein Name sei Gantenbein“ , この3つの作品を発表することによって、彼はむしろ作家として高い評価を得るようになったのである。„Stiller“ は批評家たちの高い評価を得たばかりではなく、しだいに読者の間でも好評を博して行き、Suhrkamp出版社初のミリオンセラーとなったのである」¹²⁾

Frischが逝去して20余年を経た今でも、たとえば上述の „Entwürfe zu einem dritten Tagebuch“ などのように、彼の未完の原稿をまとめた本が出版されたりもしているが、個人的な書簡の類以外はさらに新たに彼の小説やドラマなどが出版される可能性は極めて低く、彼の評価に今後劇的な変化が訪れるとは考えにくい。したがってHageのこの推論は説得力に富んでいると言えるであろう。

1951年4月、ロックフェラー財団から奨学金を給付され経済的な補償を得て、建築事務所を一緒に働いていたHannes Tröschに委ねた彼は、充実した日々を送るべくアメリカに渡った。そしてスイスではなしえないであろう様々な体験を積んで、1952年5月、滞米生活を終え、祖国スイスへ帰国した。ヨーロッパへ戻った彼は再び小説の計画を取り上げた。そして „Stiller“ の執筆の間、彼は家庭からも仕事からも離れ、一人その作業に専念したのである。Hageは「むちゃくちゃなほどたくさんの仕事量。僕は孤独な生活の名人だ」というFrischの言葉を紹介している。¹³⁾

1954年、この小説 „Stiller“ が出版され、Frischの作家としての名声が確立した。ここで彼は作家として文筆活動に専念し、生計を立てていく自信が芽生えたのであろう。このことは彼自身も強く感じていたと思われる。それゆえに彼は翌1955年に建築事務所をTröschに売却し、作家活動に専念することにしたのである。アメリカ滞在前後のこの数年はFrischにとって激動の時代であり様々な出来事が起こった。レッツィグラーベン地区の野外プールの工事と完成、次女Charlotteの誕生、„Graf Öderland. Ein Spiel in zehn Bildern“ の思わぬ不評。アメリカから帰国後の „Stiller“ 発表、翌年建築事務所の売却など、彼の人生での大きな出来事がこの時期には次々と起こっていた。そして „Stiller“ 発表の5年後、彼の結婚生活は最終的に破綻をきたし、1959年2月25日Constanzeと離婚したのである。

3 小説 „Stiller“ 完成への経緯

そもそもFrischは最初の滞米期間中、小説を書こうと意図していた。彼は1951年3月10日付のPeter Suhrkamp宛の書簡の中で次のように記している。

「私の次の仕事、つまりアメリカでの夏と秋の仕事は散文作品で、アメリカとは何のかわかりもない小説の仕事であろうと今は思っています。日記形式の書き方の可能性はあります。この小説は違った構成で同じ人間を描いている5つのストーリーが組み合わせられており、私はそれを非芸術的だが実り多い形式の着想であると思うのです。その作品のタイトルは „Was macht ihr mit der Liebe“ というのです。——私が本当に取りかかったら、

その原稿はクリスマス頃に完成するでしょう。』¹⁴⁾

この手紙は渡米する一か月ほど前に書かれたものであり、その時点で彼はすでに自作品の大まかな構想を描いていた。そして予定ではその作品は滞米期間中に完成を見るはずであった。しかし、事前の思惑通りに事は運ばなかった。継続的に執筆活動をつづけ、その結果多量の原稿が蓄積されたのだが、それは小説の素材を蓄えただけに過ぎなかった。一つ一つの関連を考慮せずに彼はともかくも原稿を執筆するという作業に没頭した。後に彼はそれらの原稿を „Stiller“ に加工して挿入している。しかし彼は散文作品を完成させるという計画を1951年の終わり頃に一時的に見合わせた。なぜなら彼は確かに原稿を書き続けてはいたが、作品として完成させたものはなかったことにある種の責任を感じていた。ロックフェラー財団から奨学金の給付を受け、自分の希望通り滞米がかなった。そしてその成果は、と自問した時、確かに膨大な量の原稿は蓄積されたが、まとまったものは何一つとしてなかったのである。その頃の精神性を振り返って、後年彼はHorst Bienekから受けたインタビューの中で次のように語っている。

「私は1年間アメリカにおりました、そして奨学金をもらっていたのでまじめであらねばならないと思っておりました。私は、うまくいかなかったけれども、600頁書いたんですよ」¹⁵⁾

この言葉通り、彼は小説の材料となるべき原稿を「まじめ」に執筆した。「まじめ」という表現に彼の人柄が凝縮されているとも思われるが、彼はその意味で責任感の強い人間であった。ロックフェラー財団に対して感じる義務感ゆえに、日々いろいろなものをしっかり観察し、かつまた創作する姿勢を怠らず成果を出さなければならない、と自戒して生活していた。そこで彼は精力的に原稿を書き続けたのである。その積み重ねが600頁にもおよぶ多量の原稿の蓄積に至ったのである。しかし結果としてそれは小説の素材を蓄えただけであった。600頁の中身は、アメリカで聞き知った話、体験した話などなどさまざまであったが、それらは主として短いエピソードの類が多かった。つまり彼はそれぞれの関連などは考慮せずにせっせと原稿を書き続けたということにすぎず、まとまった作品を完成させたわけではなかった。したがって、蓄えたものをどうまとめるかが当面の、そして最も大切なことであった。まじめであらねばならないと自分を律した精神状態と自ら課した義務感は執筆行為の歯車を空回りさせていた。たしかに蓄積される量は日ごとに増していくが、それが一つのものとしてまとまらないことに彼は一種の焦燥感を感じていたのである。しかしその作業は継続しなければならず、時間だけは刻々と過ぎ、滞米期間は日ごと消化されていってしまう。上述のSuhrkampに宛てた書簡の中にもあるように、彼はアメリカでの生活を堪能すると同時に祖国スイスと対峙し続けていたのである。作家である彼の場合それは常に創作の作業を意味し、その行為を彼は粛々と継続していたのである。つまりアメリカで日々生活していながらスイスに関わる作品の執筆に励んでいたのである。たとえそれがアメリカならでは物語であっても、いずれは彼のスイスの何かをテーマにした作品に吸収されるべき素材なのである。それゆえに、蓄積される原稿がいずれ何の作品に結実するかも明確には分からず、ともかくも彼は書き続けていたのである。そしてそこで綴られたものが後に „Stiller“ の元の原稿となり、小説の主要な部分を占めるように

なるのであった。

Frischは、より具体的には奨学金を世話してくれたロックフェラー財団のEdward F. D'Arms氏に負い目を感じていたのである。Frischの希望を満たしてくれたD'Arms氏は彼に何の見返りも求めなかった。純粹に彼に滞米の機会を提供したのである。しかしFrischは滞米の成果を何らかの形で示さなければならないと感じていたのである。そこで昔から聞き知っているDon Juanの物語を彼なりに変形して執筆することを思いついたのである。そしてその執筆のために他の小説作成の作業を一時中断することにしたのである。

Volker HageはインタビューでFrischが彼に語った言葉を伝えているが、そのなかでFrischは次のように述べている。

「私は小説を書いていましたが、うまくいきませんでした。私の小市民的な出生の由来ゆえに私はロックフェラー氏に申し訳ない気持ちを抱きました。一年間当地にいて、なんにも完成させることができていなかったのです。そこで私は、何かしらなさねばならないと考えたのです。そして私は6週間でこの „Don Juan“ を図書館に通うこともなく書きあげたのです」¹⁶⁾

その結果、新たな劇場作品 „Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie“ が生じたのである。スペインの伝説的人物、無類の好色漢と思われている人物に新たな人間像を付与し、固定された像を打ち破り、その像に新たな視点を与えようと試みた作品を彼は執筆したのである。後に彼は類似した試みを1971年 „Wilhelm Tell für die Schule“ においても行っている。ともかくこの „Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie“ で表面を取り繕った形ではあるが、Frischなりの区切りをつけたのである。Frischはまとまった一つの作品を完成させたことで気になっていた義務感という圧迫から心理的に解放され、初めて思い通りに執筆する精神的自由が生まれたのである。

彼が „Stiller“ の具体的な着想をしたのは1953年の初めころと思われるが、同年8月当時最も信頼していた良きアドバイザーであるSuhrkampにあてて次のように報告している。

「私はあなたにこのテーマについてもうお話ししたかわかりません。これは、ずっと前から再三再四私の心を引いてきたテーマなのです。しかしそれは変化し、ますます発展してきました。そして私はそれを、取りかかるべき最高の価値があるものと見なしているのです。つまり、私は再び散文作品を書いてみようと考えているのです。難しかろうものなるほど山積していますが、目標の方向性はわかっており、とりわけ（それゆえに私はいま他のすべての物をわきに置いているのですが）、これまで非常に収穫の多いものとして証明されてきたある響きを見つけ出したのです。いまやできる限り前進するつもりでいます」¹⁷⁾

Frischは „Stiller“ 作成の過程で、アメリカで蓄積した原稿を巧みに活用したのである。それらは „Stiller“ の第1部、『獄中での手記』の中にちりばめられたのである。奔放で、野性的で、冒険的なそれらの物語は非日常的で、この作品にエキゾチックな香りをふんだんに漂わせ、スイスとの隔たりを感じさせ、作品の深みを増しているのである。それまでのスイスの作品には見られない、当時としては最も先端的な作品を彼は手がけたのである。

この小説の作成についてHageはやはりFrischから聞き出した次のような興味深い言葉

を引用している。

「私は材料を持っていました。アメリカでの物語や、Stillerが監獄の中で大ぼらを吹く話のすべては、もう既に書き終えていたのです」¹⁸⁾

Stillerが後に獄中で看守Knobelに語って聞かせる殺人の話や、カールズバットの洞穴の話など、Frischのいう大ぼらの話はどのように応用できるのか、アメリカで蓄積した原稿をどのように活用すべきなのか、いったい彼はどのような小説を書こうとしているのか、この時点ではまだ全体的な展望を得るには至っていなかった。とりわけ彼は物語の冒頭部分で苦勞していた。その頃のことを彼はHorst Bienekから受けたインタビューに答えて次のように語っている。

「ある日のこと、私は家で退屈しのぎのときによくやるように、数頁 — なんとなく、何か着想しなければという息苦しさから逃れるために、タイプライターを打っていました。自分自身を知る、という思いつきほど簡単なものはありませんでした！それがそのままの形で、„Stiller“ の最初の頁になったのです。私がタイプライターを打ち続けるのに必要とした素材を、私はうまくいかなかった600頁の中から気ままに取り出し、9ヶ月後にはこの本が出来上がった、というわけなのです…」¹⁹⁾

かたくなに取り組みば取り組むほどうまくいかなかった小説の導入の部分が、ある日リラックスした状態でタイプライターに向かった時、自分でも驚くほどいとも簡単に展望が開けたのである。まるで霧がにわかには晴れるように見通しがきき出したのである。Frischは「ある日のこと」という言い方をしているのでその日付がいつのことかは明確ではないが、帰国後のことであり、もちろんロックフェラー財団に対する義務感から解放され、精神的にリラックスしてタイプライターに向かったときには違いないのである。

小説を書きたいという希望、そしてこのたくわえた600頁の原稿、その両方をどのように組み合わせれば彼自身が望む小説が出来上がるのか、その点に光明が差してきたのである。Schmitzは「その600頁の原稿の中には『SibylleとStillerの物語』や『洞窟の物語』などは既に存在していたが、それらは全体の中で占めるべき位置が明確ではなかったのである」と述べている。²⁰⁾ まさにこの点を解決することが小説の完成には不可欠な要素であった。ここで、Frischに多くの示唆を与え、あらゆる作品作成上の的確な助言を行った人物の存在を指摘しておかなければならないであろう。その人物とは、拙論においてもしばしばその名を引き合いに出しているPeter Suhrkamp、まさにその人であった。当時最も信頼していた良きアドバイザーである彼こそがFrischを励まし、勇気を鼓舞し、的確な助言を与え、彼を支え続けた本当の意味での支援者であった。Frischもまた彼の助言に謙虚に耳を傾け、その意見を作品に反映させ、期待にこたえ続けたのである。この二人の熱い友情については稿を改めて論述しなければならないであろう。

FrischはアメリカからもSuhrkampに幾度か書簡を送り、作業のはかどり具合の報告や、下書きなどを送り、彼に助言を求め、それを受け入れ、またあるときは論を戦わせ、それに応じて原稿に手を加え、またその他作品構成上の様々な意見を求めていた。当時のFrischには欠かせない人物だったのである。

難渋していた導入の部分が解決し、全体の見通しがききだして、執筆作業は動き出した

のである。そして1954年3月初めから4月中旬までの6週間Frischはレマン湖畔のモントルーに滞在し、外界から隔絶した状況で執筆作業に没頭し、一応の完成にこぎつけたのである。そして完成したものはSuhrkampが即座に見られるようになっていた。1954年6月にFrischは彼に宛てて次のように書いている。

「私はあなたに対し、われわれが „Stiller“ について話し合ったことを重ねて御礼申し上げます。それは私にとってたくさんの、そして重要な推進力となりました。私には、そのようなのです、推進力が必要なのです。私に可能な点にまででも、一人では到達することができないでしょう。これが私の仕事の悪い点であることをご存じでしょう。到達しようと努力しているその頂上の前のどこかで私は腰を降ろしてしまい、休憩し、忘れてしまい、残りの部分を省いてしまうのです。」²¹⁾

この文から、Frischの文学活動にSuhrkampがいかに深くかかわっていたかが読み取れ、Frischが彼に全面的な信頼を置いていたことが明確に認識されるのである。

一応の完成を見た今でもなお原稿にはまだまだ修正すべき箇所が存在していた。それらを指摘したSuhrkampの意見を取り入れ、さらに同4月末から、今度は家族がギリシャ旅行をしている間シュヴェイツ州のオーバーイベルクに滞在し、さらなる念校作業を行った。具体的には、既に仕上がった原稿の中に主人公の事故死を簡単に報告する『検事のあとがき』は存在していたが、その点を改善する必要があったのである。そしてこれまで以上の外界から隔絶した執筆作業をおこない、3週間で『第2部 検事のあとがき』の部分を完成させたのである。しかしその後もさらに修正作業を継続し、それは8月まで及び、『ぼくはシュティラーではない』 „Ich bin nicht Stiller“ という冒頭の文章は最後の最後、初校のゲラ刷りの段階で挿入されたのである。これで最終的に現在ある形の小説 „Stiller“ は完成したのである。

4 小説の出版

完成した小説は彼の良き友人であるSuhrkampの出版社から発行され、大きな反響を呼び起こしたのである。ここで上述したStäubleの説が再び考慮されるべきであろう。『憤慨されると同時に称賛され』という相反する表現にこの小説の持つ複雑さと、『世界中に沢山の読者を見出した』という表現にこの小説の普遍性が読み取れる。Frisch自身はその執筆作業に没頭し作品を完成させたが、それを読んだたくさんの識者たちからFrisch自身が気づかないような小説に内在する様々な問題性が指摘された。たとえば自己否定しようとする主人公Stillerに見られる『同一性』の問題である。

著名なMax Frisch研究者であり、ドレスデン工科大学中央ヨーロッパセンター長であるWalter Schmitzは1977年7月13日にFrischと対談する機会を持ったが、その時Frischは彼に次のように述べている。

「この本を書いている間、この本の本来のテーマを意識していなかった、と私は明確に思っています。もともと私の興味を引いたのは物語る素材であり、ストーリーなのです。そして私はむしろ偶然だったのですが、思いつきといってもいいのですが、一列に並べて

みようと思ったのです。この思い付きそのものと言えるものを私は意識していませんでしたし、分析もしませんでした。この本が印刷され、そして『同一性』が話題になった時に初めて、この本の中のどこにも書いていないこの言葉が意識されたのです…」²²⁾

このFrischの言葉は極めて興味深い。これはおそらくFrischが正直に話しているであろう。この言葉から、彼はあらかじめテーマやこの作品作成によって突き詰めるべき問題性などを意識して小説全体を構成し、そこから細部を詰めていったのではなく、ともかくも材料を書き溜め、それが小説となるように置き換え、全体が連なるように調整する作業をした結果この作品が出来上がったことがうかがえる。もちろん大まかな作品構成上の構想のもとに行っただけであろうが、一つ一つの挿話などがどのようなテーマや思想を含んでいるかなどは考慮せず、小説を組み立てたのである。したがって、出来上がったその作品を読んだ様々な人たちがそこに内在する問題を分析し、解釈し、夥しい „Stiller“ 論がその後出てくることになるのであるが、最も重要なテーマの一つと指摘されている『同一性』の問題をその作者のFrischがそもそもまったく意識もしていなかったということは意外に感じる読者が多いと思われる。Frischは、自分自身がこのことに一番驚いたのを告白しているのである。ただし彼の言葉に疑念を呈する意見もあり、たとえばJürgen H. Petersenは「このように膨大で、複雑に組み立てられた小説が、少なくともその中心テーマに関して言葉にして表現する前にその作者の念頭になかったということは想像しにくい…」²³⁾と記していることも付言しておくべきであろう。

好感と反感相半ばして受け入れられた小説 „Stiller“ とはいったいどのような小説であるのか、限定された紙数からその詳細については次回に譲らざるを得ない。

〔注〕

- 1) Frisch の母校EHT (Eidgenössische Technische Hochschule スイス連邦工科大学)にある『マックス・フリッシュ文書保管所』
- 2) Max Frisch Entwürfe zu einem dritten Tagebuch. Hrsg. von Peter Matt. Suhrkamp Verlag, Erste Auflage, 2010.
- 3) Frischがロックフェラー財団のEduard F. D'Arms氏に宛た1950年12月付け書簡の中の一文。
- 4) „ein entscheidendes Jahr meines Lebens“ in: Jetzt ist Sehenszeit. S.114.
- 5) Unsere Arroganz gegenüber Amerika S.222. in: Max Frisch, Gesammelte Werke in zeitlicher Folge Bd III 1949-1956.
- 6) Stäubli: S.163f.
- 7) Oskar Wälterlin演出でチューリヒのシャウシュピールハウス劇場で初演。
- 8) 翻訳については拙論『 „Stiller“ 生成への過程：もう一つの成立史』(総合文化研究第17巻第1号, 日本大学商学研究会発行。2011年6月) 1頁以下参照されたし。
- 9) Frischは1943年から8年間で„Santa Cruz“, „Nun singen sie wieder. Ein Schauspiel aus der Gegenwart“, „Die Chinesische Mauer Eine Farce“, „Als der Krieg zu Ende

war“, „Graf Öderland. Ein Spiel in zehn Bildern“, „Don Juan oder Die Liebe zur Geometrie“, といった合計6作品を執筆していた。

- 10) Hage: S.133. ただしHageはこのエピソードを第10版(1995年)までは掲載しているが、第12版(2001年)ではすでに削除している。第11版は手元がないので不明。
- 11) „Tagebuch 1946-1949“ (1950) と „Tagebuch1966-1971“ (1972)
- 12) Hage: rororo Max Frisch, S.65f.
- 13) Hage: S.54.
- 14) Schmitz: S.29.
- 15) Bienek: Werkstattgespräche, S.30.
- 16) Hage: S.53f.
- 17) Hage: S.66f. (1953年8月23日付 Peter Suhrkampあての手紙)
- 18) Hage: ebd.
- 19) Bienek: Werkstattgespräche, S.30.
- 20) Schmitz: S.30.
- 21) Jetzt ist Sehenszeit: S.138
- 22) Schmitz: S.30.
- 23) Petersen: S.24.

[参考文献]

- Max Frisch Gesammelte Werke in zeitlicher Folge, Sechs Bände. hrsg. von Hans Meyer unter Mitwirkung von Walter Schmitz. Suhrkamp Verlag, Erste Auflage. 1976.
- Max Frisch Entwürfe zu einem dritten Tagebuch. Erste Auflage. Suhrkamp Verlag Berlin, 2010.
- Bienek, Horst : Werkstattgespräche mit Schriftstellern. dtv 291, Carl Hanser Verlag, München. 1962.
- Hage, Volker : Max Frisch. rororo 321. 10. Auflage, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, Oktober 1995.
- Lüthi, Hans Jürg : Max Frisch. UTB1085. A. Francke Verlag GmbH München, 1981.
- Mayer, Hans : Über Friedlich Dürrenmatt und Max Frisch, Verlag Günter Neske Pfullingen 1977.
- Petersen, Jürgen H : Max Frisch Stiller, Verlag Moritz Diesterweg GmbH & Co., Frankfurt am Main. 1994.
- Petersen, Klaus - Dietrich : Max Frisch - Bibliographie. In: Über Max Frisch. hrsg. von Thomas Beckermann, editon suhrkamp, 5. Auflage, 1974, Frankfurt am Main.
- Schütt, Julian : Max Frisch Jetzt ist Sehenszeit Briefe, Notate, Dokumente 1943-1963. hrsg. von Julian Schütt. Suhrkamp Verlag. Frankfurt am Main, 1998.
- Schütt, Julian : Max Frisch. Erste Auflage, Suhrkamp Verlag Berlin, 2011.
- Stäubli, Eduard : Max Frisch. Vierte, unveränderte Auflage, Erker-Verlag, St. Gallen, 1971.

Waleczek, Lioba : Max Frisch, dtv 31045. Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co.KG, München, April 2001.

Walter Schmitz : Zur Entstehung von Max Frischs Roman »Stiller«. In : Materialien zu Max Frisch „Stiller“ Erster Band. hrsg. von Walter Schmitz, Suhrkamp-taschenbuch 419, 1978.

(Abstract)

Dank des Stipendiums von der Rockefeller Stiftung konnte Max Frisch von April 1951 bis Mai 1952 ungefähr 1 Jahr in Amerika bleiben. Dort hatte er so viele und verschiedene Erfahrungen, die er in seinem Vaterland nie erleben könnte. Anfangs wollte er in Amerika etwas ein Prosawerk schreiben. Aber das war nicht so leicht, wie er vorher in der Schweiz geplant hatte. Trotzdem arbeitete er da jeden Tag immer fleißig und schrieb fast 600 Seiten Manuskripte. Diese wurden später Quelle seines ersten Romans „Stiller“. Den Roman zu schreiben war aber nicht einfach und so schwierig, da half ihm ein deutscher Verfasser Peter Suhrkamp, der gab ihm bedeutungsvolle Ratschläge. Erst mit seiner Hilfe konnte Frisch seinen Roman fertig machen. Dann kam sein Roman „Stiller“ endlich zur Welt.